

## 井上文雄の短冊署名

鈴木亮

## 一

佐佐木信綱によつて「江戸派の殿將として幕末の歌壇に光を放つた」<sup>(1)</sup>と称される、徳川時代後期の国学者歌人井上文雄（寛政十二年〔明治四年〕。其の筆蹟と云へば、独特な力強い書法が印象的である。線の太い個性的な筆致ゆゑ、短冊色紙の類であつても読むのに骨が折れるし、書翰の読解に至つては苦心慘憺すること頻りである。文雄の書に就ては夙に、「典麗流達で千蔭流に近い」<sup>(2)</sup>、「三藐院流を学んだとおほしき大振りで素朴な書体」<sup>(3)</sup>との指摘があり、師一柳千古の影響を受けてゐる可能性があると論ぜられてゐる<sup>(4)</sup>。そして、この独特な筆蹟は門人にして妻妾たりし松の門三艸子、養女大野定子に引き継がれること、なつた<sup>(5)</sup>。

古書展などの短冊売り場を覗き、文雄のものがあればすぐに其れと判る。他を圧倒するかのやうな線の太い字の短冊で、目に飛び込んで来るからである。尤も、其ればかりが文雄の短冊ではない。

「文雄」と署名された短冊を数多く見てゐるうちに、細い字の井上文雄短冊があることに気がついた。桂園派の祖香川景樹に就ては、短

冊署名が「其の形より大略七時代に分ける事が出来」、稲村三羽、飯野厚比、渡辺一清といつた門人がよく景樹の書風に似せてゐるといふ考究がなされてゐるが、其の他の国学者歌人のものとした短冊に就て粗上に載せられることはきはめて少ないのが現状である。

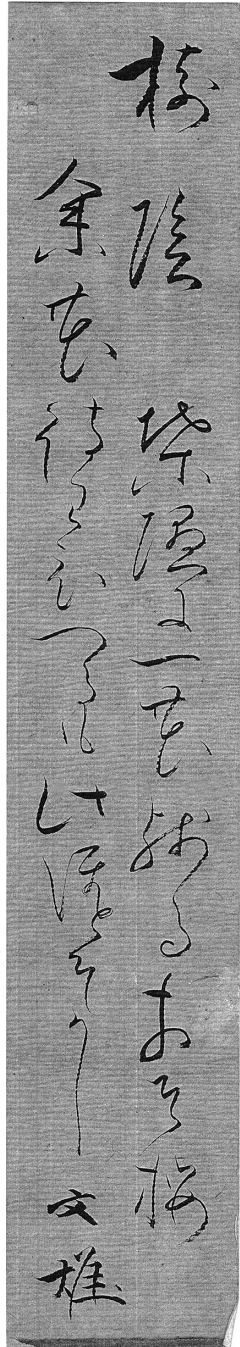
こたび本稿に於ては、井上文雄の短冊を資料として、書の中でも特に「文雄」署名の書き様の変遷に就て一考察を加へたい。

## 二

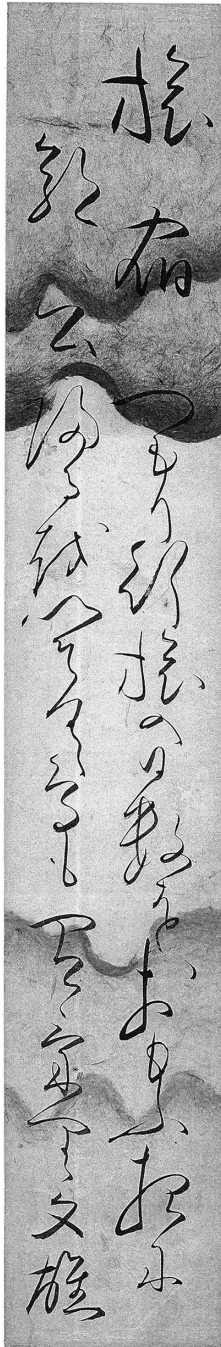
先づ、署名の形の異なる井上文雄の短冊を八枚掲げる。この排列は、染筆時代順に抱るものである（クを除く）。

文雄の短冊と云へば、エオカキの如き線の太いものが広く世に行はれてゐるといふ印象が強い。名家の短冊を影印で紹介する、野崎英夫編『歌人百家帖』（大正二年、中央歌文会）、『短冊』復興十二号（昭和二年一月、文行堂書店）、井上通泰『南天荘墨宝』（昭和五年、春陽堂）、佐佐木信綱『日本名筆全集短冊集』（昭和五年、雄山閣出版）、『短冊』昭和統二二号（昭和六年八月、文行堂書店）、北野克編『歴代名家短冊帖』（平成元年、三樹書房）、古橋千嘉子編『古

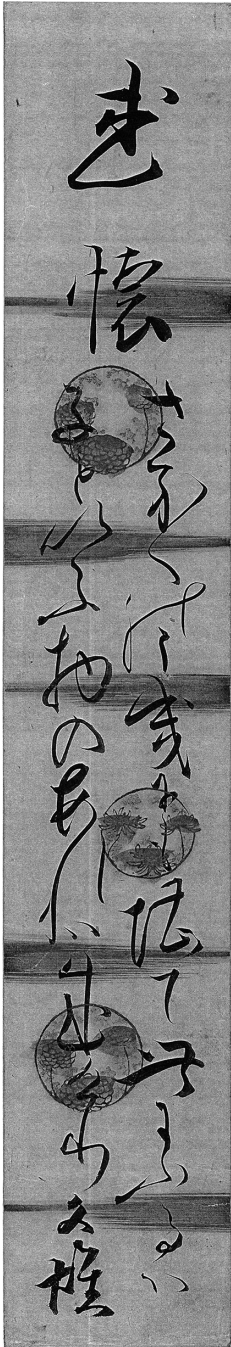
ア 樹陰余花 柴隱に一花残るおそ桜待わひつるも此ほとそかし 文雄 (架蔵)



イ 旅宿郭公 つもり行旅の日数をおもふ夜に帰るをいそく鳥も有けり 文雄 (架蔵)

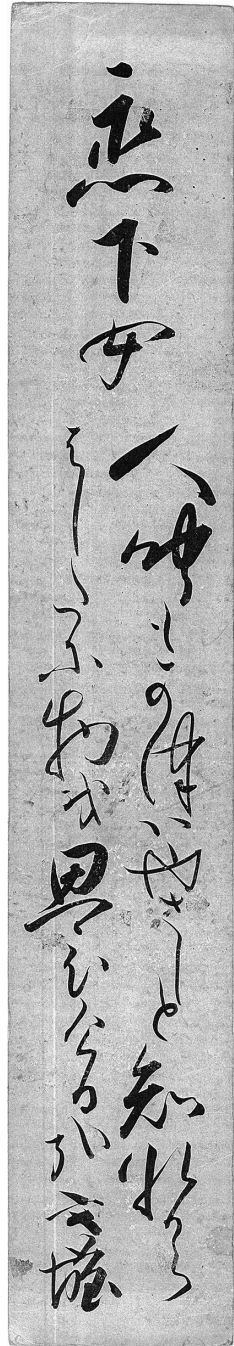


ウ 述懐 さまくのうきにも堪て世にふるは子といふ物のあれは成けり 文雄 (架蔵)

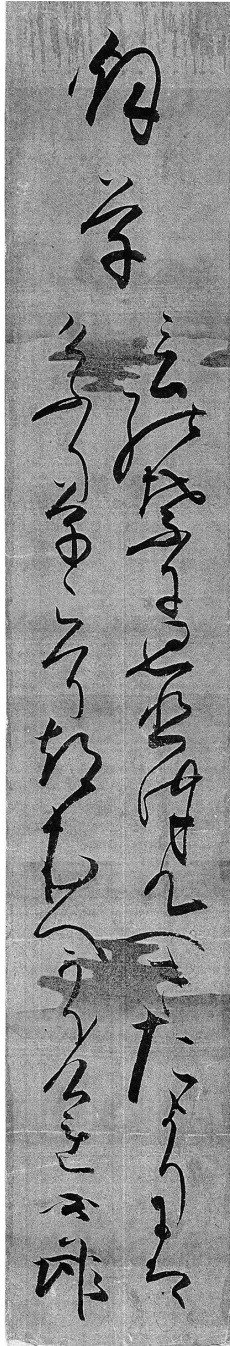




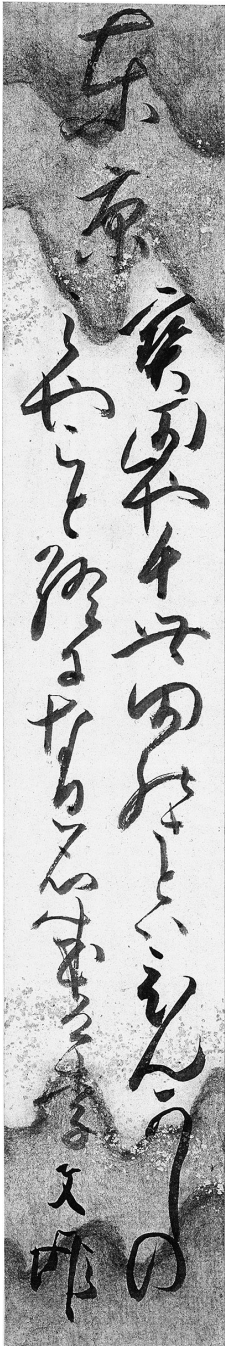
エ 恋下女 人聞もかつはやさしと知なからはしたに物を思ひける哉 文雄（架蔵）



オ 烟草 言の葉に思ひつくへきたよりにはけふり草こそつむへかりけれ 文雄（架蔵）



カ 東京 宝田や千世田のさとはひんかしのみやこと終になる名成けり 文雄（架蔵）



キ  
山家花 大かたの物こそたらね山里は花に富たる処なりけり 文雄（架蔵）

山家花 大かたの物こそたらね山里は花に富たる処なりけり

ク  
御かへし 君々の扇合のかちわさによき物あまた給はせよかし 柯堂（架蔵）

御かへし 君々の扇合のかちわさによき物あまた給はせよかし

橋懐古館資料集第二「国学者・歌人篇」（平成九年、古橋会）、『短冊Ⅱ 鉄心斎文庫所蔵芦澤新一コレクシヨンより』（平成十五年、鉄心斎文庫伊勢物語文華館）、鉄心斎文庫短冊研究会編『むかしをいまに 鉄心斎文庫短冊総覧』（平成二十四年、鉄心斎文庫伊勢物語文華館）といった書籍雑誌にエオカキいづれかの署名短冊が掲載されることから、其れは証せられよう。其の他は僅かに、茂原市立図書館古文書講座編『「国雅帖」 茂原市立木高橋家の短冊』（平成十九年、茂原市立図書館）にイ、色田幹雄『短冊を楽しむ 武州・川越・一力斎コレクシヨン』（平成十七年、文芸社）にウ（文雄短冊三枚中一枚がウ、残りエカ）の署名短冊が収められてゐるばかりである。

架蔵の井上文雄短冊二百七十四枚を署名の形に従つて分類してみるに、ア三枚、イ五枚、ウ二十一枚、エ六十二枚、オ五十一枚、カ八十三枚、キ四十八枚、ク一枚といふ内訳となり、エオカキで全体の九割近くにも及ぶ。この数から見ても、線の太い雄渾な筆蹟の短冊が文雄のものであるといふ印象は間違つてはゐないであらう（但し、エには若干線の細い字の短冊も含まれる）。

なほ、クの如く「柯堂」と号を以て署名された短冊は、殆ど目にすることがなく、嘉永五年以降に書かれたものであることは分かるのだが、時代を同定することが困難である。ために、ク「柯堂」はこたびの考察からは外すこと、する。

これらの文雄短冊であるが、署名の仕方こそ異なるものの、アからキに至る書風の連続性を指摘するのは易しいであらう。署名の変

化に就て云ふと、

ア↓イ…「文」が大きく、「雄」が行書となる。

イ↓ウ…「文」が小さく、些か線が太くなる。

ウ↓エ…二筆目をはつきりとさせた寸詰りとも云ふべき「文」、孫虔禮の「雄」（『五體字類』）となる。

エ↓オ…米芾の「雄」（『五體字類』）となる。

オ↓カ…縦長の「文」となる。

カ↓キ…「雄」が図案化された花押となる。

といった具合である。

### 三

次に、このアからキに至る七期に分類される短冊のおほよその執筆年代の根拠となるべき資料を示す。但し、得意作を幾度か短冊に認めるといふことは間々あること<sup>(10)</sup>、其の短冊が果していつ書かれたかといふことを特定するのは、詞書に年紀が記されてゐない限り、可なり困難な作業を伴ふ場合もあるだらう。

線の細いアだが、この書法は、有斐亭金蟬『集古文』（天保三年刊）序文（執筆年次未詳）に見られる（序に於て「文」二筆目が短いといふ若干の差はあるのだが）。天保三年、文雄は三十三歳である。なほ、文政年間の文雄の行状は不明な点が多く、これ以前の文獻にアの署名を求めることはかなはなかつた。この二筆目が長く縦に短い「文」は、後のエオに継承されてゐる。

また、同様に線の細いイが文雄短冊であることは、この詠が、長



崎諏訪神社の神官青木永章のものした『後東路記』（天保九年成写）<sup>12</sup>に収録されることに拠る。『後東路記』は、永章が息永古を連れ天保九年三月に長崎を出発し、同年八月に帰郷するまでの紀行文。五月六日、永章は江戸に於る自らの旅宿にて、本間游清、海野遊翁、橋守部、村田多勢子、斎藤彦磨、横山桂子、文雄ら江戸住の歌人たちと歌会を催してをり、其の際に詠まれた歌である。従つてイは、天保九年（三十九歳）頃に書かれたものと云ひ得るであらう。また、其れより十年ほど溯るが、井上淑蔭『かくれさと』<sup>13</sup>（文政十年跋刊）序文（執筆年次未詳）の署名も同様のものである。文雄は三代代迄は、線の細い字を書いてゐたといふことになる。其の下限は、山本明清『古今和歌六帖標注』（天保十一年刊）序文（執筆年次未詳）であらう。

『古今和歌六帖標注』出版の三年後、不惑を過ぎた頃から同じ書法ながら徐々にではあるが線が太くなつて来る。其れがウである。小菟庵確嶺編『統枯尾花集』（弘化二年刊）序文（天保十四年執筆、四十四歳）、山田常典『掌中源氏物語系図』（天保十五年刊）序文（執筆年次未詳）に顕らかである。

『掌中源氏物語系図』序文を記してから嘉永五年（五十三歳）迄、文雄は序跋の類を殆ど記してゐない。<sup>14</sup>嘉永六年三月には関橋守編『賀五十齡歌』跋文、五月には自著『冠註大和物語』の序文を記してゐるのだが、両書とも板下を別人が書いてゐるため、エの書法で記した序跋の類は、管見の及ぶ限りでは長瀬文豊編『雁のはしら』（嘉永六年序刊）序文（同年執筆、五十四歳）しか見出し得なかつ

た。

オは、横山由清『活語自他捷覧』（安政四年刊）序文（同年執筆、五十八歳）、井上淑蔭編『めぐみの里』（安政六年跋刊）跋文（同年執筆、六十歳）等に見られる。

「雄」の字はそのまゝ、に縦長の「文」と変化したカの書法であるが、蜂屋光世編『江戸名所和歌集』（文久二年刊）序文（同年執筆、六十二歳）あたり始まり、慶応四年七月十七日、江戸が東京と改称された頃まで用ゐてゐる（カの題は「東京」である）。

この慶応四年の四月には、徳川幕府に同情を寄せ、明治新政府を批判する歌を門人草野御牧と詠み、『諷歌新聞』と題した歌集に纏め発刊してゐる。この廉によつて明治改元後の十一月十二日、文雄御牧の兩名は糺問局の人屋に拘禁されてしまつた。其の悲歎するに余りあり、獄中にて、

糺問局の獄屋につなかれて

稀也と世にいふ老の坂道にひと屋有とは思ひかけきや 文雄

糺問局の獄やに在ける夜雪ふりければ

さえとほる人屋の夜床下ひえて寐られぬ物を雪さへぞふる 文

雄

といった歌を詠んでゐる。井上通泰『南天莊墨宝』（昭和五年、春陽堂）に収録されるこの二葉の短冊、署名はキである。画賛短冊に於ては、既に慶応二年同三年にこの署名を用ゐた例が確認出来、<sup>15</sup>元々は慶応年間以降の画賛の際の書法であつたのであらうが、明治改元（九月八日）に際して、或いは逮捕後に和歌短冊及び序跋に

於てもキへと書風を改めたといふこと、ならうか。古稀を迎へた明治二年七月に執筆した、近藤幸殖『読史余感』(明治四年刊)序文、同年十二月執筆の井上淑蔭『歌格新論』(明治二年序刊)序文もキの形となつてゐる。図案化された花押の「雄」——これには、明治元年十一月、諸侯に対して花押は自筆を以て認めるべしと命じた、新政府への揶揄ひの意識も少なからず内包してゐると考へるのは穿ち過ぎだらうか。

## 四

徳川時代後期の国学者歌人の中に於て文雄の短冊は、可なりの枚数が現存してをり、短冊屋でも古書展でもよく見かけるものである。文雄の短冊三百六十六枚(津山藩主松平斉民旧蔵)を翻刻した、築瀬一雄編『短冊井上文雄歌集』(昭和三十二年、湯浅四郎)といふ著作もあるし、中島利一郎「井上文雄と集外遺作」(『学苑』十卷八号、昭和十八年八月)では、其の所蔵する短冊七十七枚に解説が施され、鉄心齋文庫(東京都品川区)には四十三枚の文雄短冊が蒐蔵されてゐた。<sup>18)</sup>百年前の言葉だが「文雄の短冊はあまりに多く伝はつて居てめづらしくない」(井上通泰『南天荘絵葉書解説』二)大正十年、久保田米齋)といふもある。それゆゑ然程高価でもなく、目にするま、購入してゐたら、いつしか二百七十四枚も所蔵するに至つてゐた。文雄は在世中頗る人気があり、墨蹟を求めめる人が後を絶たなかつたのであらう。「氣のよき人にて何事を頼みても心安く書きてくれ」<sup>19)</sup>たと紹介されるやうに、多くの短冊色紙懐紙扇面半切に筆

を執り、それらが尚古の趣味ある人びとによつて、震災戦禍をくゞり抜け今日に伝へられた。其の志を継承してゆくことは我々の重要なつとめであらう。

果して文雄は、生涯如何程の染筆をしたもののだらうか、氣になるところである。

註1 佐佐木信綱『近世和歌史』(大正十二年、博文館)

2 鈴木淳「井上文雄」(大曾根章介ほか編『日本古典文学大事典』平成十年、明治書院)

3 鈴木淳「鉄心齋文庫短冊涉猟 和歌・短歌編」(鉄心齋文庫短冊研究会編『むかしをいまに 鉄心齋文庫短冊総覧』平成二十四年、鉄心齋文庫伊勢物語文華館)

4 中澤伸弘「徳川時代後期歌人井上文雄の書」(『若木書法』十四号、平成二十七年二月)

5 熊谷武至「井上文雄文献傍註例その四」(『続々歌集解題余談』昭和四十三年、私家版、同「大野定子の板下」(『続々歌集解題余談』平成元年、水鏡名古屋支社)、小林強「架蔵短冊資料点描」(大取一馬編『中世の文学と学問』平成十七年、龍谷大学仏教文化研究所)、拙稿「柯堂門の人びと」(『成蹊國文』四十号、平成十九年三月)、中澤伸弘「徳川時代後期歌人井上文雄の書」(前掲4)。なほ、松の門三、岬子は晩年書風を改め、線の細い字となつてゆく。

6 彌富實水「短冊物がたり」(大正七年、磯部甲陽堂)。なほ、小林強「架蔵短冊資料点描」(前掲5)に於ても、景樹の短冊署名に就て言及がある。

7 一戸涉「短冊研究文献目録(明治以降)」(鉄心齋文庫短冊研究会編『むかしをいまに 鉄心齋文庫短冊総覧』前掲3)

8 嘉永五年二月十七日「柯堂會」(伊能穎則『壬子詠草』嘉永五年成写。『新編なつころも』(『香取群書集成第四卷』昭和五十九年、香取神宮社)

- 所」所収)が「柯堂」初出と思はれる(同年一月十七日は「歌堂会」。これ以降「柯堂」を用いたか。佐佐木信綱は「家の号を歌堂といふ。のち柯堂に改む。」「統日本歌学全書第十一編 明治名家集上巻」(明治三十二年、博文館)「解題」と、文雄が号の表記を改めたことを語つてゐる。
- 9 鉄心齋文庫短冊研究会編『むかしをいまに 鉄心齋文庫短冊総覧』(前掲3)、内田誠・増田知之・吉良史明「近世から近代にかけての短冊の諸相」(公益財団法人日本習字教育財団学術研究助成成果論文集)四巻、平成三十年三月。なほ、二字の名の下一字を花押として表記する署名の仕方は、国学者矢掛弓雄(天保二年〜大正六年)に先例が見られる。隅田川神社所蔵の絵巻物「文明葬祭之図」末尾に「嘉永二乙酉年九月日 矢掛斎宮弓(花押「雄」)」とある(隅田川神社の文化財 矢掛弓雄の世界I)平成二十九年、墨田区教育委員会。
- 10 たとへば、架蔵の文雄短冊に於ては「継母 そのほらにあらぬふせやのは、木々はた、このもとのなげき成けり」「継母 其ほらにあらぬ伏屋のは、木々はた、このもとのなげき成けり」と、同じ詠が二枚存する(「調鶴集」七八六。署名の形はいづれもオ。
- 11 拙稿「井上文雄年譜稿」(『成蹊國文』三十九号、平成十八年三月)
- 12 三巻三冊、崎川弘子氏蔵。
- 13 「かくれさと」以前に著された文雄の処女作「大井河行幸和歌考証」(文政三年刊)「提要」の署名は楷書で記されてをり、自筆他筆を判断するにはためらひがある。
- 14 嘉永二年の年紀を持つ、井上淑庵『めさまし草』(写本、無窮会神習文庫「玉籠」二三五)の序文があれど未見。
- 15 慶応二年「いつもきく」(からす(総))の声のかうまでも長閑けき物かはるの初空 六十七翁文雄」(佐佐木信綱「日本名筆全集短冊集」昭和五年、雄山閣出版)、慶応三年「世の中のうちといふ事をよそにしてよき耳のみ長くかはや 丁卯はる六十八翁文雄」(「短冊」復興十二号、昭和二年一月)がキの署名。同時期、慶応二年初春に記した、草野御牧「あめのいぶき(すぎのものとは)」(刊年未詳)序文、及び同年七月に記した、藤堂高猷「美與之野帖」(刊年未詳)跋文はカの署名。画賛短冊は七枚架蔵してをり、全てキの署名である(明治二年七十歳の時のもの四枚、明治三年七十一歳の時のもの一枚、年次未詳二枚)。
- 16 「今はた、人のなさをよそにせてひとり」に君はあへかし 文雄」「澄わたるふえの声はた面白の(月(絵))の夜ころのそ、ろありきや 文雄」(井上文雄賛渡辺清竹取物語語図(双幅)「佐佐木信綱「近世和歌史」大正十二年、博文館)。渡辺清(安永七年〜文久元年)は、本居宣長と平田篤胤の「夢中対面図」を描いた尾張藩絵師。清在世中に賛を書きつけたとなると、キの署名時期の上限となる(文久元年、文雄は六十二歳)が、清の歿した翌年、文久二年の自画賛「六十にみつのはしめやふくろく寿 六十三翁文雄」(「福祿寿自画賛(幅)」(架蔵))に見られる署名はカであることから、清逝いた後の賛であらうと思はれる。
- 17 「○諸侯 花押ハ白書之證ニ有之候処、文飾之弊習ニ仍リ、往々彫刻之分ヲ相用候事、其主意ヲ失ヒ、無謂次第ニ付、向後花押ヲ相用候書類凡テ自筆ニ相認、可差出旨、御沙汰候事。」(『太政官日誌』第百五十九、明治元年十一月)。文雄が『太政官日誌』に目を通してめたことは、鈴鹿の門人磯部長恒へ宛てた書翰(慶応四年八月十四日)に拠つて知られる。「太政官日誌」も一覽致候 尾州江州大水之由天変地妖ニ御座候 江門も唯薄水を踏心恒との一考察」(『灘谷近世』十九号、平成二十五年三月)文雄と磯部長恒との一考察」(『灘谷近世』十九号、平成二十五年三月)
- 18 鉄心齋文庫短冊研究会編『むかしをいまに 鉄心齋文庫短冊総覧』(前掲3)
- 19 大和室輯「近世花押譜」(「集古」甲子五号、大正十三年八月)↓「三村竹清集」昭和五十七年、青裳堂書店。竹清の師永阪或斎(文政十年〜明治三十四年)は文雄の娘を娶つてをり、この評は或斎の語るところに拠る。



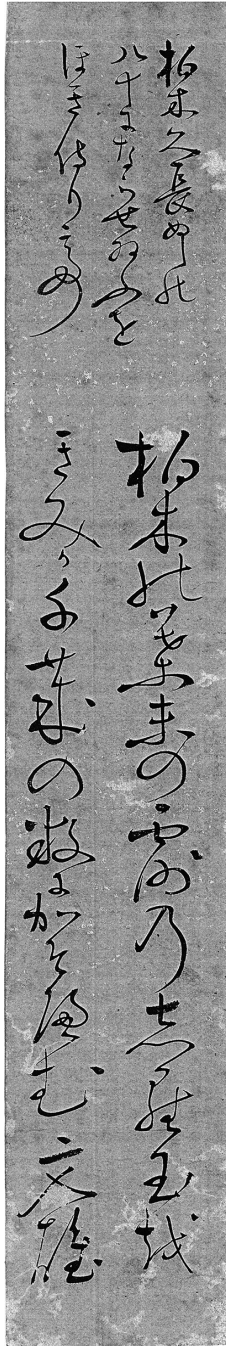
〔附記〕

大藪文雄短冊

柏木久長ぬしの八十にならせ給ふをほき侍りて

柏木の葉末の露のしら玉をきみか千歳の数にかそへむ

文雄（架蔵）



\*井上文雄の筆蹟と区別するために、同名の国学者大藪文雄（天保九年〜明治三十五年）の短冊を掲げる（大藪文雄は、中野莊次編『和歌俳諧人名辞書』（昭和六十一年、臨川書店）に立項されてをらず、其の短冊を確認することが困難である）。大藪文雄の家集『綴玉集初編』（明治三十二年、真王舎）には、「柏木久長翁の八十の賀に 柏木の葉におくつゆのしらたまをきみかちとせの数にかそへん」とあり、架蔵短冊と若干の異同がある。

\*僧文雄（元禄十三年〜宝暦三年）の短冊とされる「春恋 梅か枝にうくひすきなく春の日のかけてこひしきかきりなりけり 文雄」（北野克編『歴代名家短冊帖』平成元年、三樹書房）は、号無相での署名短冊「忘るなよりの海山さくり来てたまのうら波立かへるとも」（平林縫治・仲古谷友吉・小野利世編『難波津』大正十二年、浪速短冊研究会）、「海原や入江のなみにみか、れてこ、ろのたまのありかを忘る」（佐々木勇蔵『短冊手鑑心のふるさと』昭和四十一年、短冊手鑑心のふるさと刊行会）と比較すると、明らかに筆蹟が異なり抜ひに注意を要する。

\*大野定子の代筆した文雄短冊（裏面に「定子書」）がある由（舟野源五郎

〔短冊白話（統）〕「短冊」二号、大正十年三月↓『三村竹清集六』昭和五十九年、青裳堂書店）なれど未見。

\*井上文雄生誕の日は不詳であったが、信濃の国学者岡村菊叟（忠香）の歌集『千曳乃巖』（慶応三年成写、早稲田大学図書館所蔵）序文に「おのれは八月の望に生れ」と自ら記してゐることから、八月十五日生れと判明した（中澤伸弘先生の御示教に拠る）。

（すずき・りょう）平成十八年度大学院博士後期課程満期退学  
（東京都立江北高等学校教諭）